

昭和51年5月9日第三種郵便物認可（毎月1回1日発行）昭和52年6月1日発行 通巻67号 ISSN0385-5457

ヒマラヤ

HIMALAYA

1977年6月号



日本ヒマラヤ協会——HAJ

HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

HAJ・ヒマラヤ集会 (18時30～20時) 無料または実費

<名古屋> 5月27日(金)

テーマ ★ ラダックとザスカルの山旅

ところ ★ エア・インディア名古屋営業所
(名古屋駅前 毎日ビル7階747号)

<東京> 6月23日(木)

テーマ ★ 中央アジアとチベットをめぐる
(「中央アジア・シルクロード」出版記念会をかねます)

ところ ★ 日本交通協会会議室・新国際ビル9階
(国電有楽町日比谷口、都庁南西角)

<岐阜> 7月8日(金)

テーマ ★ アンナプルナ山麓の旅(8%映画)

ところ

<登山> 岐阜の集会終了後、大日岳への登山
を計画しています。7月10日までの2泊3日。

参加希望者は6月30日までにHAJ名古屋事務所
へお問い合わせ下さい。

~~~~~

<ヒスタリ・クラブの集り> 6月4日(土)～5日  
静岡県寸又峯・費用4,500円・申込は至急電話で

## HAJ・ヒマラヤ調査隊・ツアー

### <ラダック・カシミール>

◇ 8月4日発 19日間・28日間

カシミール・ラダック自由トレッキング

234(千円)(添乗員なし)

世界の屋根を行く 450(千円)(ガイドあり)

◇ 8月7日発 14日間 372(千円)(添乗員あり)

◇ 8月7日発 9日間 372(千円)( " )

東洋のスイス・カシミール・パカンス旅行

### <ネパール>

◇ 12月25日発 28日間 212(千円)(フリー)

12月26日発 14日間 348(千円)(添乗員あり)

12月29日発 8日間 286(千円)( " )

エベレストでお正月を・ネパール・トレック

※ ※ ※

詳しい日程表がありますのでお問合せ下さい。

上記の費用は52年4月1日を基準としており、航  
空機、現地の都合で予告なく変更することがあり  
ます。

(株)トラベル・ジャパン

第7回 東日本ヒマラヤ研究会(予告) 6月25日(土)～26日 参加費8,000円(宿泊費・会議費他)

場所 秋田市大町3丁目 協同社大町ビル ◇前夜祭 6月24日(金) 同一会場 映画会(300円)

日程 第1日目 10時開会 ◇1976～1977のヒマラヤ/日本人とヒマラヤ/トレック・セミナー  
◇パネル討議 ヒマラヤの可能性を探る/地域別情報交換会

第2日目 遠征組織論(よい遠征のために)/ヒマラヤとシルクロードを駆ける 12時閉会

申込先

## 「ヒマラヤ」6月号 目次

|                            |    |
|----------------------------|----|
| ビルマにて.....                 | 1  |
| ダージリンのトレック.....            | 1  |
| カラコルムの山旅.....              | 2  |
| <H&Sプラン> 着々と実現に近づく.....    | 3  |
| <H&Sプラン> インド通信(14～18)..... | 4  |
| <関係の機関・団体 その7>             |    |
| ダージリンのヒマラヤ登山学校.....        | 8  |
| 朝日セミナー・                    |    |
| 「シルクロード」を受講して.....         | 10 |

|                        |    |
|------------------------|----|
| 日本大学スーリスタン踏査隊報告会.....  | 12 |
| シッキムの夕べ.....           | 13 |
| <ヒマラヤ学入門 その47>         |    |
| ヒマラヤ関係資料の入手方法-その1...   | 14 |
| <レストハウス>               |    |
| 書評-セイロン島の密林遺跡.....     | 15 |
| 日本からヒマラヤから.....        | 16 |
| カシミールとラダックの旅.....      | 18 |
| 「ヒマラヤの彼方へ」講演と映画の会..... | 20 |

〔表紙画：今村朋信〕

## ビルマにて

3月14日 ラングーン 藤井 毅

3月8日にインドを出発し、ラングーンに着いた。ラングーンは静かな街で、カルカッタとの対比がきわだっている。

ラングーンではH&Sプランに関連して、観光局や関係のある役所をあたってみたが、北部ビルマよりインドへ入域するという先例がないため、観光目的ではとても許可にならないということであった。マンダレイを越えて、北へ行けるのは、メイミョウぐらいまでで、それより先のミチナの方へは「治安が悪い」ということで行けないようである。「軍隊と一緒に行動すれば行ける」と観光局の役人はいていたが、そのような許可がどうして得られるか、難しいことであろう。

インドのように申請書がある訳でもなく、いわば白紙の状態から出発しなければならない訳で、どこから接触してよいか分らない反面、思わぬところから可能性が生れてくるかも知れないということもある。

仮に政府要人などとコンタクトをとったとしても、何分、政治情報が入り組み、中央政府の統治状態が悪い国であるから、それがあって足かせとなるかも知れない。

観光客が「治安が悪いため」という理由で行けないところは北部に限らず、南部の海岸部にもある。

とにかく観光ビザは1週間と限られているのでこの間に何もかも済むのは大変困難である。しかし、ビルマはインドとはまた違った興味ある国であるから、いろいろと体験してみたいと思っている。

「インド通信」などでインドのホットなニュースを送っていただいた藤井毅(東京理事)は去る3月29日、約半年の海外調査を終えて無事帰国されました。今後はこの経験を基に東部ヒマラヤ研究会をますます盛り立てていただく予定です。東部ヒマラヤ研究会に関心のある方は

藤井毅方同会へ問合せて下さい。  
(HAJ)

## ダージリンのトレック

1月8日 ダージリン 伊藤 満

1月7日、西郡氏と会い、今日HMIを訪問しました。テンジン氏と会い、カンジロバの報告書を渡しました。今夜はテンジン氏宅に招待されております。

1月2日～1月6日までサンダクプー、ファルト方面に藤井毅さんと2人でトレッキングに出ました。

ルートは、

1月2日 ダージリン～サンダクプー (タクシー 6時間)

1月3日 サンダクプー～ファルト (歩き " )

1月4日 ファルト～ラマン ( " " )

1月5日 ラマン～ビジャンバリ ( " 11時間)

1月6日 ビジャンバリ～ダージリン (タクシー 1時間)

で、往きはカンチ・エベレストの山々が素晴らしく、帰りは部落から部落への道で大変おもしろく、よいルートです。日本人も何人かは歩いているようですが、もっと紹介してもよいでしょう。

宿泊施設は各所に整っており、トレッキングに必要なものほとんどダージリンで手に入ります。

トレッキング後、1月8日の朝、藤井毅さんと別れました。

### 急告 ヒマラヤ登山学校参加者募集

日本山岳会主催・日本ヒマラヤ協会協賛で、この秋第1回ヒマラヤ登山学校を開きます。遠征の実務と登山(東部ガルワール、タルコット6099m)を厳しく指導します。定員30名。

講師は、原真(マカルー登攀隊長)、伊藤行人、(ラトック隊員)、小川信之(ジャヌー隊員)、池沼慧(パミール隊員)、沖允人(インドヒマラヤ研究家)などに現地K・P・シャルマー(タルコット登頂者)、シェルパ10名などを予定しています。詳しい計画書・要項があります。

期間 9月22日～10月15日(24日間)

費用は一切を含んで 54万円

なお、第2回は1978年夏、カシミールの山の予定。





## カラコルムの山旅 (6)

＜ヒマラヤ紀行＞

河西俊郎

7月22日

今日はABCへ往復したが、リエゾンも行くというので3人で行くことになった。ところが1日行程だというのに、彼はピストルとピッケル以外は持って行かないという。だいたい6時出発がコックが寝坊したということでBC発7時30分で、食糧は我々が持っていくことになった。それに彼はいつぞやの捻挫を気にしていたし、その調子を見ることもあった。歩き初めてみると、彼とて高度には馴れないせいか息使いも荒く、休みがちであった。ABC13時着。テントには誰もおらず、そのかわり留守番をかねて、エサをあさりにきた小さなネズミがいたのには驚いてしまった。暮営地はオーガーの南壁をはじめ、遠くはマンゴ・グソールまで見える。そしてきれいな水の得られる比較的良好な場所であったが、モレーンといってもすぐ下は水で、テントの中へ水が流れ込んでいた。

見上げれば今日のオーガーは朝から神秘的ヴェールを冠ったような姿であった。隊長の話だと8月10日頃を頂上アタックのめどとしていた。カラコルム・ピアフォ氷河の最高峰オーガー。果して我々の腕の中に、心の中にはほえんでくれるだろうか……………。

氷河は1週間といわず、どんどん変っていった。ABC附近はスキ一のゲレンデにもなりそうだった冰雪原が、今では波のようなうねりができ、あちこちにクレバスが出来ていた。体がすっぱり入ってしまいそうなものも2、3あったし、きれいな水をたたえた小さな池も、もうすぐ姿を消しそうであった。ウズンブラック氷河のスナウトにあったテーブルロックもだいぶ無くなっている。ABCの往復でいやなのは、朝渡れた川が午後には増水(アフタヌーン・フラッド)で必ず濡れなくてはならないことであった。岩のあり場所は解っているので急な流れにちゅうちょはするもの。たいがいその場所を目がけてパチャンと行くのである。朝は岩が相当露出しているのが、日中氷河が溶けて1つの本流めがけて集まって、かなりの

増水となるのである。

オーガーの丘へひと登りするとBCはすぐそこであった。今日最後の荷上げで疲れがどっと出て、ゆっくり歩いた。もうすぐ午後6時。夕陽の中であおいだオーガーはすでに雲の中であった。今日は誰がABCへ帰っただろうか……………。

× × × × ×

### 氷河に積んだケルン

初めて荷上げに行ったとき、行く道々、自分のために複雑なモレーン地帯を無駄なく、また安全に歩くために、分り易い岩の上へケルンを積んだ。それも随分沢山きめ細かに積んだつもりであった。さて、帰路、一人で下ってきてモレーン地帯へ入ったが、なかなか自分の積んだケルンが見当らなくて2度程あちこち迷ってしまった。今日こそはと、入念に台にした岩の色と反対の色の石を拾って分りやすく積んでみた。モレーンの中ではそれこそ岩だらけで、そしてあまりに広大で余程うまい位置、つまりそのケルンが浮き出て見えるように配慮しないと、全くどこにあるのか分からなくなってしまうのである。

今日は前回の経験を生かしていろいろ考えてみた。第1に、できるだけ回りの岩よりその岩が高いこと。第2に、台にした岩と積んだ石の色の組合せ。第3に、ケルンとケルンの間隔や必要な場所の選定などであった。こうして随分と幾つものケルンを積んでいったので皆より遅れてしまった。

ルートの途中には、ときどき赤い小旗を立ててあったが、それは大ざっぱであったからどうしてもケルンが必要であった。積み終ったケルンを振り返ってみると、あのくらい注意深く積んだのにもう分らなかつたりしてガッカリしたものであった。

さて黄昏せまる頃、イヤなモレーン地帯にきた。はたして今朝の努力が実を結んでくれるのだろうか。

(つづく)

急告

当分の間、東京事務所は休みます。



## <H&Sプラン>

### 着々と実現へ近づく

#### 「経過・計画第2次案・概要」

2月26日～27日に東京・世田谷の会員・今井千代子さん宅で第2回準備委員会を開催した。詳細については「ヒマラヤ」6月号のH&Sプラン特集号でお知らせするが、ここではその概要などについて記し、皆さんのご協力とこの計画への多数の参加を期待します。

#### 経過 現地調査

- ① 51年9月 イランとその周辺について榊井照和が現地調査し、ダマバンド山、他の資料を得た。イランについては問題はほとんどない。
- ③ 51年8月 アフガニスタン地区を佐藤優が調査。ワハンへの入城の打信を今後も続ける。パーミヤン、他の旅行地の調査完了。
- ③ 51年10月～52年3月インド各地を藤井毅が詳しく調査。「インド通信」として概要は報告済。
- ④ 52年1月 伊東満がダージリン地区を調査、トレッキングもおこなった。シッキム事情も掴む。
- ⑤ 52年1月 ネパール各地を鈴木が調査、トレッキングに関しては十分な資料と情報を集めた。
- ⑥ 52年2月から約2年間 佐橋忠明がイラン、中近東へ出発した。トルコなど入山困難な地域を重点的に調査する。「中近東通信」を連載予定。この他多くのH&J会員による情報が事務局へ入りつつあります。

#### 当面の計画 1977～1978年

6月のビスタリ・クラブに合せてH&Sの計画のツメをおこない、正式に実行委員会を発足する。1977年夏はパミールへ5名を登山隊として派遣。ソ連領中央アジアの情報を得る。同じく、1977年夏はラダックを中心としたインド北西部からパキスタン東北部の現地調査がおこなわれる。カラコルム、サセル山群の両偵察隊も送り出す。

1978年はシッキムに現地調査隊を長期間派遣。

#### H&S本隊の計画

- ① キャラバン隊 ヒマラヤとシルクロード一周  
1979年3月日本を出発し、中国、ソ連、トルコ、イラン、アフガニスタン、インド、ネパール、ビルマ、中国とリレー式に車で走る。1981年5月までの2年余りかかる。車に関心のある人を募集し

ている。

- ② 8,000m 峰登山 カンチェンジュンガ(8,598m)  
未踏のルートから独創的な登り方で登頂する計画。シッキム側からの入山である点も注目される。

1978年末頃から偵察をくり返し、1981年に本隊を出すよう準備をすすめている。

- ③ パミール登山(1977年)、サセルカンリ登山(1978年)

当初の計画より1年早く実現される。1979年からのカンチ計画にそなえるために、早くから高処登山の経験者を得たいという希望もあるからである。

- ④ 各地区のトレッキング、ツアー、学術研究

ヒマラヤの仏教、高山蝶、地形地図などの学術グループによる研究活動も始まっている。

ブラマプトラ川のボートによる川下り、ラダックのレーからインドの南端のコモリン岬までのサイクリング、ヒマラヤでの「タコ上げ大会」、気球を使った登山などなど創意と冒険のプランが生れつつある。

ネパール東から西へのリレー縦走、ヒマラヤ花の旅など子供連れのトレッキングや旅も企画中である。詳細は追って発表する。

\*\*\*\*\*

### 第2回 H&S 準備委員会

2月26日(土)～27日 於：東京・世田谷

出席者：岩水 竜峰、 稲田 定重、 沖 允人、  
鈴木 康志、 西郡 光昭、

- ① H&Sプランの一環として進められている、講演と映画の会「ヒマラヤの彼方へ」については、経過報告、後援団体の取り決めを行う。
- ② 登山計画については、カンチェン・ジュンガ、サセルカンリ、カンチ偵察の計画を了解する。承認は6月のビスタリー集会時の理事会にて行なう。
- ③ 7月1日発行の「ヒマラヤ」をH&S特集号とし、内容は日程の発表、キャラバン隊の募集等。
- ④ H&S委員会構成について、各調査隊、登山隊の責任者(プロジェクト)と地区担当事務局で構成。なお、カンチは清水澄氏が担当する。本委員会は6月集会(ビスタリー)より発足する。
- ⑤ H&S報告書は全計画終了後(1981年又は1982年)にまとめて出す。それまでは、帰国報告または概要にとどめる。
- ⑥ 次回は6月5日・ビスタリー集会。また、次回は6月25日・秋田ヒマラヤ集会で開催予定。

## インド通信

(14)

藤 井 毅

11 月 21 日 (続)

ゴウハティの United Publishers は別に看板を出しているわけでもないのだから Modern Book Department ( シロンにも支店がある ) と同じ建物の奥にある。Modern Book Dept. の入口のとなりの細い通路をはいつていく。そこがオフィス兼倉庫である。

Lawyer's Bookstall は Pan Bazar の通りに面していてすぐわかる。ここには United に無い本……学術書、Lawyer's での出版物がたくさんある。特にゴウハティ大学の Publication Dept. の本に貴重書が多い。全部買った。ここの店の人は親切だった。

〔定期刊行物〕

United Publishers が Solo Agent となつて扱う。月刊誌「North-Eastern SPECTRUM」はインド東北部を扱っていておもしろい。創刊されたばかりで日本からの購読可。年に 12 ドル ( 船便 )。11 月現在 3 月号が店に出ている。あと創刊されたばかりの「EASTERN CHRONICLE」がある。これは前者よりも学術書の色合いがこい。1 年 5 回発刊で、同じく海外購読可。年 3 ドル。

×      ×      ×      ×      ×

## インド通信 (15)

11 月 30 日    シロンにて

11 月 26 日にゴウハティからシロンに着いた。寒い。インド通信も 2 カ月の間に 15 号になってしまった。4 日から 5 日に 1 回の割で書いていたことになる。この町に着いて以来、もう書きたいこと、書かねばならないことは山ほどあるのだ。しかし、じっくり腰をすえて書けないのがつらい。はじめのつもりでは「インド通信」には事務的なこと、たとえば許可関係とか事情とかの他に、私が見聞きしたことも書いていこうと思っていた。しかし、それはもうあきらめた。ここで「インド通信」は許可関係等事務的なものに終始させることにしよう。そして、カルカッタか、東京に帰ってから、

その他のもっともっと大切なことをまとめていくつもりだ。

### メガラヤ州内の許可事情

まず第一に、シロン到着後すぐさま S.P.O. へ行き報告しなければならない。ホテルに泊っていても同じように S.P.O. へ行く必要がある。ホテルは報告を代行してくれない。ホテルからも通報がいくが、それは何ら正式な効力は持ちえない。許可証に S.P.O. の裏書きがない限り、登録は無効である。到着、出発ともに報告の義務があるので注意すること。登録後、私は Meghalay Secretariat の建物の Passport Dept. に行つて、メガラヤ州内の滞在の延長と、他の町の許可をとつてきた。即日発行してくれた。ほぼ無制限に許可はおりる。私は 2 週間、Shillong、Jowai、Cherropunjee、Jecran、Tala の他数か所をとつた。Tala は Garo 丘陵、Tawai は Taintia の丘陵の中心地であり、まだ、外国人ツーリストには目新しいところだ。

Passport Dept. のエライ人は Khasi 族の人だが Garo 丘陵にはいった日本人女性、おそらく中根千枝氏のことだろうが、大分昔のことだといひながらも覚えていたのにはおどろいた。

ところで、ボクは許可証をとるときに、必ず許可発行原簿を見せてもらうのだ。いったいどういふ外国人が入っていて、それはいつ、どこまでいったか? そういう情報を集めるのだ。それによるとアッサム各地、メガラヤ各地にかなり入域している。主力はオーストラリア人、これは多い。本当に多い。ついでフランス人。かつてのイギリス人、アメリカ人をしのいでいる。そして、日本人は……、ブッダガヤとか、ガンガー沿い、カトマンズにくさるほどいながら、結局それは群をなししているだけではないか。このアッサム、メガラヤ地には全くといっていいほどない。

それから、インド東北部を旅行するなら、まずカルカッタへ来て、それからゴウハティ、シロンにくること。その他は省略していい。ゴウハティでアッサム全域の許可をとり、シロンでメガラヤ全域の許可をとる。

カルカッタはその前段の、ゴウハティ、シロンの許可取りだ。デリーではアッサム、メガラヤはシロン、ゴウハティ、マナス、カジランガのみだ



という話はデリーで発行できる許可書という意味で現地へ行けば前記の通り、かなり許可の範囲は広い。ついでに、12月8日にGaró丘陵のTuraの近くの町で、大きなお祭がある。Garóの人々によるドラム（太鼓）を使った踊り（百人以上で踊るとか）がみものだとか。Wangla Danceという。シロンからTuraまではバスで12時間かかる。

やはり、シロンはインド東北部の中心地だ。ミゾ・トリブラ、アルナーチャルとのいいコンタクトがとれる

## ～シロンガイド～

### 本屋

この町の本屋Modern Book Store は以前の面影はない。インド東北部関係の本は少ない。

そのかわり、State Transportのバススタンド（ゴウハティからのバスが着く）近くにあるChapala Book Stallに行くこと。外観は薄きたなく、目立たないが、インド東北部に関する本の在庫はすごい。そのうえ、ここは出版もやっているの、ここでしか買えないめずらしい本が多い。

再び確認すると、Gauhati では United Publishers、Rawyer's Book Stall、ShillongではChapala Book Stall がめばしい本屋ということになる。

ちなみに、4,000Rp もだせば、インド東北部全域の本が、ほとんど手にはいる。約16万円くらいだ。安い。仮に腰をすえてやるなら、そのぐらい出してもいい。

それから、資料としての穴場はインドの国勢調査の報告であろう。各州ごとに信じられない程、莫大な量の報告書が出ている。アルナーチャルだけでも8,000 ページくらいになる。大冊の報告書でしかも安い。A4版の800ページくらいので8Rs というものもある。アルナーチャル、ミゾ、ナガマニプール、トリブラ、アッサム全体をそろえたら100冊くらいになるがBasic Data としては申し分ない。今は1971年の国勢調査報告が出ている。ただ地図の関係で内務省の許可がおりるまで市販されないものもある。アルナーチャルのだけは全シリーズ手に入れた。

### アルナーチャル博物館

かなり荒れたところ。即売所もあるが、さほど見る価値はない。以前あった展示物のいいものはGauhatiのArunachal Exhibitionにほとんど持ち出されている。前にSurvey of India North Eastern Circleの小さな小屋のようなオフィスがある。

### 大衆食堂

Buddhist TempleはPolo Bazar の近くにある。そのMeeting Hall のすみに私は宿泊していた。

Polo Bazar の中にあるEastern Restaurant はおすすめできる。中国料理屋で、非常に安くてうまい。ここの中国人の経営者はいい人だ。あと数軒レントランがあるが、行っていないので不明。

Gauhati ではTaj Restaurantへ行こう。Farcy Bazar からBabu Bazarの方へ行く途中にある。ここは回教徒経営の安食堂で、ビーフが食える。ビーフカレー&ライス&ダルで何と2Rs。ビーフは山もりだ。この町に来たら、マトンやチキンやフィッシュカレーは食わずにここで牛肉を食うとよい。

### シロンの町の役所

まず、Tourist Information でシロンの町の地図をもらう。ついでにメガラヤ全体のも。これがないと話にならない。

シロンの町、どこだってそうだがタクシーに乗ることはない。City Bus が私達が行くようなところには必ず走っていて、しかも安い。タクシーは大半が雲助で、料金の平均を知らないといくらぼうな金をとられる。

S.P.O. (F.R.R.O.) とPassport Dept. は隣り合わせの建物なので便利である。Passport Dept. はMeghalaya Secretariat の大きなビルの一階（ground floor）にある。このビルはシロンで知らない人はいないので、これを目指していけばいい。

位置的には National Highway 40号線（NHW40）。通称G.S.Road（Gauhati ～ Shillong Road）ぞいにある。

中心地より歩いて10～15分位。

### アルナチャル博物館

Cachcumiereにある。NHW 44 ぞい (G.J. Road) にある。

Arunachal Information & Public Relations は KENCH'S TRACE の中にある。

CENSUS Operation Arunachal Pradesh は Laitumkhrah の Police Beat House と Geological Survey of India の office の近くにある。ここは少々わかりにくい。

× × × × ×

## インド通信 (16)

12月12日 ゴウハティにて  
メガラヤのガロ丘陵のトゥラ (Tura) へ行ってきました。Wangala Dance というガロ族のお祭りがありました。

ガロはシロンとも趣きを異にした、実にいいところ。シロンよりもいいかも知れません。

祭に出席していたアルナチャルのチーフ・ミニスターの Mr. Thungong, 「Enchanted Frontiers」の著者、Mr. Nari Rastonji にも会い、話をしました。

## インド通信 (17)

2月6日 シッキム・ガントクにて  
ようやくガントクまでやって来ました。2月3日のことです。幸運にも滞在許可の延長を Inspector general police という警察のトップの方から獲得できました。3日間の延長です。その許可証の日数の範囲内でしたら西シッキム、南シッキムには自由に旅行できます。出域も、どこでもかまいません。西シッキムはツーリスト向にオープン (許可のある人のみ) されています。Tourist Lodge も Gayzing (ギャジン) 町にあります。Dak Banglow も使えます。現在シッキムで Tourist Lodge のあるのは、ガントク、ギャジンの二カ所のみです。

最初は西シッキムへ行くつもりでしたが、ガントクが気に入ってしまい、3日以来ずっとこの町にいます。

北シッキムの Lachen まで行けたらと思っていたのですが、それは無理な話のようでした。しかし、外国人が全く北シッキムに入っていないのかというと、そうでもないのです。昨年ですが、フランス人4人が北シッキムの Singhik (シンギク) - Mangan の先 - まで入っています。

これは、4人の中の一人、50才近いフランス人の女性が、シッキムの Chief Minister のフランス語を話す - 奥さんと偶然知り合いになり、そのコネで10日間のパーミット延長と、北シッキム訪問許可をとって入ったわけです。特別なケースとはいえ、そうして旅行している外国人が過去に何人もいました。おまけに、そのフランス人女性は、フランスのTV会社の秘書だとかで、1977年5月頃にでも、フランスのTVチームを連れて、TV映画撮影のためシッキムにもどってくるそうです。おそらく北シッキムにも行くことでしょう。

日本人関係では、年末に東大教授の中根千枝氏がシッキムにやってきました。

中根氏はカルカッタ大学で講演したついででの訪問のようです。もう三度目とか。

私は三年ぶりの訪問ですが、ガントクも大きく変わりました。

バザールは見違えるほど立派になり、道路も整備されています。しかし、平野部からの移住者がものすごく多く、ガントクの町は彼らに占領されつつあります。当然、インドの一部になったわけですから、陸軍がものすごい数で入ってきています。王宮もインド陸軍により半封鎖状態です。例の王宮の私兵であったシッキム・ガードは武装解除の上解散させられています。しかし、シッキム王室の名残りをとどめる唯一のものは、王宮の中にひるがえるシッキム国旗のみです。

ガントクは今や、建築ブームでホテル・貸家が大変な数で建っています。貸家は平野部からの移住者用です。

今、グリーンホテルという3年前と同じホテルにいますが、ここも大分変わりました。

Tourist Office も開設され、そこの出している「ガントクの観光バス」がシーズン中毎日出ています。一人10Rs です。グリーンホテル横に現在新しいビルが建設中で、次のシーズンまで

には完成の予定です。

Tourist Office と Cottage Emporium  
が入るはずで。

6、7年の計画で、ガントクに飛行場を作る  
プランが進んでいます。まもなく着工です。ガント  
クの北北西側の山の斜面です。小型飛行機用です。

カルカッタ〜ガントクというダイレクト・ツー  
リスト・バスのサービスもすでに始まっていま  
す。現在は止っていますが、次のシーズンには再  
開の予定です。

今の Governor が Tourism に 大変興味を  
持っていて、その力が大きいようです。

SIKKIM の観光ポスターが何千枚と印刷中  
で、もう少しで全インド中に現われるはずで。

「SIKKIM EXPRESS」という週刊ニ  
ュース誌がガントクで出ています。一部 20 p. 他に、  
SIKKIM 政府発行の日報紙「SIKKIM HE-  
RALD」があります。これはタダです。

すでに御存知だとは思いますが、全インド軍合  
同のカンチ登山隊が 1977 年 3 月に シッキム 側  
からカンチを目指します。

隊長は、N. Kumar で行動開始は 3 月 15 日  
です。すでにガントクにそのパーティーの一員らし  
いのが来ているという噂もあります。会いたいの  
ですが、何せ軍隊のことですので、HMI か何か  
の紹介状がないと無理のようです。

西シッキムの道路整備もかなり進み、「カンチ  
のふもとまで道路を作るのだ」と P.W.D. (   
Public Works Dept. ) のある役人は言っ  
ていました。

Tourist Lodge の開設も進んでいます。ガ  
ントクの中にその Tourist Guide という全シ  
ッキムの地図と、ガントクの市内地図が描かれて  
います。

\* \* \* \* \*

ガントク滞在中、毎晩のようにチャン ( Cha-  
ng ) を飲みに行っています。カルカッタにある  
Country Spirit の店ですが、カルカッタと  
違い飲ませる酒は Chang です。

太い竹筒にミレットを入れ、湯をさしてしばら  
くして飲むあれです。たっぷり 1 リットル以上  
あり、それで Rs. 1.50 です。

シッキムは酒が安いので有名です。シッキムウ  
イスキー、ラム、ジン etc. 大変安く、どこで

も手に入ります。シッキムウイスキーの最高級品  
は一本 58 Rs もします。その下の銘柄「シャン  
グリラ」は一本 Rs. 18.25 です。これはカルカ  
ッタで買うと、何と 3 倍の Rs. 48 もします。

Bijanbari で買った シッキムブランデーは、ガ  
ントクでは Rs. 12 です。

3 月 6 日。実に運よく快晴となり、ガントクの  
街中よりシッキム・ヒマラヤの雪をかぶった山々  
がズラーッと見渡せました。

ガントクの向い側の屋根越しに、様々の高峰が  
手にとるように見えるのです。

残念ながら知識に乏しいため、どれが何の山か  
は全くわかりませんでした。かなりの針峰です。  
夢中で写真を撮りましたが、果して写っているか  
どうか。一応期待しててください。

先週は 7 日のうち、カンチェンジュンガが見え  
たのは 2 日間のみだそうです。実に幸運でした。  
今の時期は雲が多くてほとんど見えないそうなの  
です。

## インド通信 (18)

2 月 25 日 カルカッタ

シッキムからカルカッタに帰ってきました。カ  
ルカッタにも暑さがもどりつつあります。連日 30  
度を越す日が続いています。夕方になると定期的  
に雷を伴う大雨がやってきます。インドの短か  
った冬はもう終り、モンスーンをむかえるばかり  
となりました。私の好きな季節です。

カルカッタでの最後のまとめの日、一軒の古本  
屋を見つけました。C.O. Book Stall ( 9 ,  
Shyama Charande Str. Calcutta 12 )  
という小さな本屋ですが、山の本がかなりありま  
した。

\*

カルカッタ発ガントク行のダイレクトバスは  
まだ再開されていません。シリグリーガントク  
ーカルカッターシリグリーを運行する地元バス会社  
との話し合いがついていないようです。

\*

インド滞在中は HAJ の関係者に大変お世話に  
なりました。厚くお礼申します。

( 終 )



HMI — Himalayan Mountaineering Institute Darjeeling

■■■■■■■■■■ ダージリンのヒマラヤ登山学校 ■■■■■■■■■■

稲 田 定 重

カルカッタから空路1時間でバグドグラに着く。インド平原の熱気をふり切るように蛇行しながら有名なトイ・トレーン、またはバス、タクシーで高度をあげて行くと、やがてしょうしゃな高原の街に入る。海拔2,135 m、インド第一の保養地ダージリンである。ヒマラヤ登山学校、HMIはこの街の西の突端Birch Hillにあり、東にカンチェンジュンガが間近に連なる絶好の環境に建っている。ダージリンは世界有数の山岳景観もさることながら、シェルパ誕生の地として、またシッキム・ヒマラヤやエベレストへの登山基地として登山史に古くから名を残す山岳都市である。インドで最初の国立登山学校がこの地に建設されることになったのは当然といえよう。インドが高所登山教育に力を入れ出したのは多分に国際上の要請からであった。中部国境紛争では戦々然としたものと並んで、高所障害の多発が大きな問題であったという。インドにとってヒマラヤは、登山のグラウンドであるだけでなく、国境であり、国防の最前線であることを考えればうなづけることである。

### 1. 創立、組織

1954年、時のネルー首相直々のお声がかかりでスイス山岳財団の援助も得て設立された。初代校長はN.D. Jayal (1958年、チョー・オユー遠征で病死)で、実技主任は創立以来エベレスト・ヒーローのテンジン・ノルゲイがつとめている。副主任は世界で只一人エベレストに2度登頂したナワン・ゴンブで、この下に多くのシェルパがトレナーとして配されている。インド首相を総裁としていただき、IMF総裁や、西ベンガル州知事などが名をつらね、現校長はA.G.S. Grewalである。

### 2. 施設など

学校を訪れると立派な山岳博物館が目をつくる。ここには1965年インドエベレスト隊の記録、装備類、各国山岳会(連盟)のベナント、機関誌、山岳図書、その他興味深い資料が展示され、終日見物人が絶えない。(現在までの入場者7万人という)。中庭に面して教室、校長室、HMJの編集

局、テンジンやゴンブのオフィスなどがあり、一段下には受講生の宿舎群が並んでいる。校長公舎も立派で、2階から下げられたザイルがあたりの風景にマッチしている。

実技教習はダージリンのグレンデ(テンジン・ロックなど)でも行われるが、主として西シッキム(カプルー氷河)にあるベース・キャンプで行われ、往復のトレッキングも教習の一部をなしている。

### 3. 教育

(1) 対象 主として国内の青少年、軍人、各山岳会会員を対象としている。アドベンチャー・コースには各国から受入れているが、アドバンス・コース及びベーシック・コースは西シッキムが外国人立入禁止のためか殆んど受入れていない。但し、ビルマ、ブータン、ネパールなどは特別扱いするのか、少数ではあるが入校している。

#### (2) 各コースの教習内容

Basic、Advance、Adventureの3コース制。

#### イ、Basic Course

32日間で、山岳及登山技術に関しての基礎を教えている。課程は次のとおりである。

7日間 — 順応(ダージリン。歩行、登攀、読図、健康管理、装備等の基礎について)

7日間 — 西シッキムのB.C.まで120 km、20 kgのザックでのトレッキング。

11日間 — B.C.での実技(岩登り、氷雪技術、救助技術のトレーニング)

5日間 — 帰路ダージリンまでのトレッキング

2日間 — 整理、卒業式

#### ロ、Advance Course

Basic Courseより一段上の階層を対象にリーダー養成。36日間

7日間 — 順応(ダージリン。座学、小遠征のプランニング、登攀、救助技術のトレーニング)

7日間 — BCまでのトレッキング、この間自然科学などの勉強

14日間 — BCでの実技（上級登山技術訓練、5,013 m峰への登山）

4日間 — ダージリンまでの帰路トレッキング

2日間 — 整理、卒業式

#### ハ、Adventure Course

21日間、アドベンチャーの精神高揚、能力開発などを目的に、青少年を対象に実施している。内容は、ロック・クライミング、イカダ乗り（冬のみ）、生存競技、ボート乗り、トレッキングなど面白い。期間中にサンダクプー、ファルット、ランゲートなども訪れる。男子のみである。

#### (2) 年齢制限

ベーシック、アドバンス両コースは18才～40才（但し、特例で40才以上も可という）、アドベンチャー・コースは15才～18才となっている。

#### (4) 教習の時期

ベーシック、アドバンスは4～5、9～10、10～11、11～12月の年4回開催され、うち、4～5月については女性のみを対象としている。アドベンチャー・コースは1月と7月の2回、学校の休暇中に行われている。

#### (5) 授業料

ベーシック、アドバンスは400 Rs、アドベンチャー・コースは100 Rsとなっている。

入学は所定の願書があって、これに身体検査証を添えて校長あて申し込むことになっている。

#### 4. その他の活動

##### (1) 国内山岳会の指導

国内の山岳連盟や単位山岳会の要請によってコーチを派遣している。

##### (2) 出版活動

以前出していた「Harf Years Letter」に代って「Himalayan Mountaineering Journal」が現在まで9号発行されている。主としてインド・ヒマラヤの遠征記録、HMIの年間業績レポートなどである。インド登山界を知るには欠かせない文献である。1,500部を出しているという。35ドルを支払ってライフ・メンバーとなると毎年送ってくれる。日本でももっと多くの人に読んでもらいたいとの話である。（注：ライフ・メンバー希望者は筆者あて申し込んで下さい）

##### (3) 登山活動

教程内でのトレーニング山行の他に、HM

Iのインストラクターが参加した遠征が数多く行われている。インド・ブータン合同のGhangkar Punsan（Kangkap Punzum 7,541 m）、英印合同のChangabang（6,864 m）遠征などがそれである。

創立以来、1974年現在での卒業生は次の通りである。

ベーシック・コース 2,492名（うち女性 377名）

アドバンス・コース 383名（うち女性 77名）

アドベンチャー・コース 996名（男子のみ）

これら卒業生はインド国内でそれぞれ中堅として活躍している。アドバンス・コースのOBが主体となった遠征としては1955年カメット（7,757 m）、1957年ナンダ・デヴィ（7,816 m）、1958年チョー・オユー（8,153 m）などがある。ちなみに1975年HAJガルワール隊のリエゾン・オフィサーのフンダルもアドバンス・コースのOBであった。

インドにはこの他に、ネルー登山学校（ウッタル・カシ）、マナリの西部ヒマラヤ登山学校、カシミールのスキー・登山学校などがあるが、歴史、スタッフ、内容においてHMIはインドを代表している。

HAJでも以前から機関誌や遠征記録を送ったり、数人がライフ・メンバーとして登録したり、あるいは直接同校を訪れて交歓している。

シッキムも間もなく外国人にトレッキングの領域を開こうとしているのでHMIとの交渉は今後益々深めて行きたいものである。

Addressは、JAWAHAR PARBAT,  
DARJEERING, WEST BENGAL

#### \*\*\* 講演と映画の会 \*\*\*\*\*

「ヒマラヤの彼方へ」を成功させよう

すでに予告したようにHAJでは本年度最大の行事として「ヒマラヤの彼方へ」を企画しております。各地での会を成功させるために皆様のご協力をお願いします。6月中旬に新名簿とともに入場券10枚くらいを該当地区の方へ送りますので販売にご協力下さるようお願いいたします。

会員以外の方で入場券販売にご協力いただける方やすぽーず店などをぜひご紹介下さい。（HAJ）

## 「シルクロード」を受講して

鈴木康志

今回のこのゼミナールは、最近のシルクロード・ブームの火付け役となった人達を講師に迎えたものであり、講師陣も一流である。

第1回が松本清張、そして陳舜臣、加藤九祚、岩村忍、平山郁夫、並河萬里、色川大吉、樋口隆康、後藤四郎、と続く。反響が大きかったため、2度開催された。

以下そのあらましを要項を参考にしながら記してみた。

### (1) 松本清張「文明の東西交流」

さて、第1日目は、松本清張が総論として口火を切った。

まず、古事記と新約聖書には、幾つかの共通点が見られる。聖徳太子が貧しい民に衣服を与える話〔かたおか山の伝説〕は新約聖書では、ゴルゴダの丘・キリストの復活と酷似しているという。また、その類の話は中国にも残っているといわれている。

古代ペルシャに起った、ゾロアスター教（拝火教）の動きもこのようなものである。まず、ゾロアスター教は、BC.6、ペルシャの予言者ゾロアスターによって創始されたものであり、善神と悪神を持ち、お互いが戦い善神の勝利を望むのをもって宗旨としている。善神の象徴は、太陽、星、火であるところから、光明神ともいわれる。反対に悪神は暗黒神と呼ばれる。中国には、仏教と同じ時代（南北朝）に入ったといわれるが、そのような文献や証拠は見つからないので密教的色彩が強かったのかも知れない。また、日本においては高野山の火祭りなどは、拝火教の変形ではないだろうか。飛鳥などにある、石像、猿石など珍しい像は、ペルシャの拝火神殿の名残りかと思わせる形である。日本でもやはり密教として隠れた存在だったかも知れない。

以上のように、東西における古代の話、あるいは遺跡などを巡ってその共通点を展開させた、氏の著書である「火の路」や一連の古代史を巡る著作からは、常に新鮮な推理が展開され興味深い。一般学者によって論じられる古代史も、もう少し

飛躍的な推理があっても良いと思う。

シルクロードは、いわば歴史を探る旅でもある。小松左京の言葉を借りれば、東西交流2,000年の歴史についての知識がなければ、シルクロードはほこりっぽい単調な一本の道路に過ぎないのである。今、少年マガジンで連載している「三つ目が通る」なども観点を変えてみると興味つきないマンガである。

### (2) 陳舜臣「長安から敦煌まで砂に埋もれた古都」

長安はシルクロードの起点であり、そこから西へ漢の武帝が軍事基地として建設した河西の四郡を経て西域にはいる。河西四郡は現在の甘肅省西部で、その最西端が敦煌郡であった。そこは漢文明と西方文明とがオーバーラップした土地である。長安から西域へ行く人は、この地方で西の文明にふれ、西から長安へ来る人はこのあたりで徐々に漢文明が濃くなるのを感じた。その意味で興味ある土地であるといえよう。

陳舜臣は過去において、中央アジア（中国）を数度訪れており、特に1976年の紀行をまとめた「敦煌の旅」（平凡社刊）は、シルクロード・ファンの方は、もうすでに手にして読まれたことと思う。今回はこの「敦煌の旅」と東晋の僧、法顕（中国から印度に入ったはじめての人物）のたどった道を比較しながら話が進められた。

法顕は329年（当時60才頃）に、教典の不完全をなげいて同学の僧4人と共に長安を出発した。約6年程かかり印度に入り、そこで梵語・梵文を学び経典を写し、その後、セイロンに渡り、舟にてジャワへ、そして長安へと帰った。なんと長安に帰り着いた時には79才であったという。そして氏はこのような法顕の姿に打たれたという。

最後に、「敦煌の旅」の中で見られる、数々の遺跡をスライドで紹介して閉会した。

### (3) 加藤九祚「古代中央アジアの道とくらし」

中央アジアは古来シルクロード上で大きな役割を果たしたソグド人の故郷であった。また、スキタ



イや匈奴、突厥などの遊牧民とオアシス農耕民との接触地域であり、東西の文明交流の舞台であった。この中央アジアにはどのような民が住み、またシルクロード路上にはかつてどのような文明と集落、寺院が栄えたか。（配布パンフより）。

加藤氏は、過去数度にわたりソ連中央アジアを訪れていたが、特に今日は昨年の暮れウズベックとタジック周辺の仏教遺跡を調査旅行された時の成果を述べた。

中央アジア（ソ連領）の仏教遺跡は、シルクロードの道筋に沿って点在している。また、仏教の布伝についてもシルクロードに沿って伝わったことを表わしている。これらの仏教遺跡は第2次大戦以後に急速に明らかにされた。それまでも若干の調査が行われていたが、詳しい調査は行われていなかった。

最後に氏は、仏教の知識、漢文の知識を身につけた若い人達が今後これらの地域に入って研究をして頂きたいのが我々の願いですと述べて、講演を終了した。

#### （4）岩村 忍 「中央アジアのギリシャ王朝バクトリア」

紀元前328年、アレクサンドロスはヒンズークシュ山脈を越えて中央アジアに侵入し、327年までに中央アジア（西トルキスタン）の大部分を征服して北西インドを経由し、西南アジアに達し、323年にバビロンで死んだ。

この偉大な征服者は中央アジアの古都バクトリアにアレクサンドラ・バクトラを建設し、その部将と部隊を駐留させた。アレクサンドロスの死後、このギリシャ人王朝は独立の王国となって繁栄したが、紀元前125年よりすこし以前に遊牧民大月氏の侵入によって征服された。

アレクサンドロスの中央アジア征服は瞬間的な現象にすぎなかったが、バクトリア王国は東方におけるヘレニズムの一つの中心として中央アジア、インド、および日本を含む東アジアの文化に著しい影響をもたらした。

このバクトリアギリシア人の数奇な運命の跡を辿ってみた。

#### （5）平山郁夫・並河萬里

##### 「対談・私のシルクロード」

シルクロードを撮影しはじめてからすでに永い年月がたった。

馬や駱駝や驢馬は私の仲間であった。いてつく寒さと、谷にひしめく幾千幾万の墓が吹雪の中で見えかくれする異様な世界で、あるいは豪雨と雪どけ水で砂漠が海になるとき、あるいは強烈な太陽と青い深い空の下で、あるいはオアシスでテントをはるとき、あるいは月明りで銀色に輝く砂漠の中で、……いつも彼らと共にあればさびしさもこわさもなかった。

民族の血が透みこんだこれらの荒野で、私の激情は抑えられ、この永遠の静寂の中にひたすら身をまかせるだけであった。

暑熱はきびしく、地面からの反射はすごい。

眼のとどく限り、人や動物の住めそうな場所は見えず、巨大な石塊と断崖と血のような赤黒い砂の谷と、風に吹きあげられる黄色い飛砂うかかった。

ただ禿鷹のちらつく姿だけが、ただ一つの生命のしるしのように思えた。

いま、私が歩いているこの道は、数千年来、隊商が忘却と孤独と危険と共に通り抜けていったその道である。そして、信仰も文化も芸術もそこら生まれている。

かつて、人類の絢爛たる文化が華を咲かせていたことを思い出しながら、われを忘れて、はるかに消えていった時間と空間の中にカメラを捨てて立ちつくすこともあった。

#### （6）色川大吉「アフガニスタンの曠野と人」 — 砂嵐の中で考える —

アフガニスタンは文明の十字路、歴史の旋風の目、アジアの内陸部の最奥の地と言われている。日本人はこの地域の曠野と中世的な面影を残す街並に深い憧憬の情を抱いている。

シルクロードを愛する人なら一度はこのアフガンの曠野に身をさらしてみたいと願っている。なぜであろうか。なぜ、それほどまでに私たち日本人をひきつけるのであろうか。一人の歴史学者としてこの問題を考えてみたい。砂嵐の中に立って……。遙かなる歴史の残酷さに思いをはせて……。風土と人間と文化圏の異相を考えてみたい。

#### （7）樋口隆康

##### 「東西を結ぶ二つの道」

シルクロードは東西の二大文化圏を結ぶ、交通の道として知られているが、もう一本、北方ユーラシア地帯を通過して、東西を結ぶ道がシルクロ

ードに平行してあった。この二つの道はお互いに対照しあうことによって、それぞれの特色を明確に浮彫りにすることができる。一つはステップの道であり、他は砂漠とオアシスの道である。一つは騎馬民族の道であり、他はラクダと隊商の道である。一つの道によって、黄金の文化が運ばれ、他の道によって、石や土の美術、あるいはガラスが運ばれた。

日本の古代文化の中にある異質的なものの源流を追って、この二つの道をたどってみた。

## (8) 後藤 四郎

### 「終着点としての正倉院」

正倉院の宝物の上に中国の西方諸地域の文化の

× × × × ×

## 日本大学ヌーリスタン踏査隊報告会

隊員：佐藤文宏氏（日大経済学部助手）

松波氏（在カーブル・カーブル大学体育学部講師）

於：アジア会館

日時：昭和52年2月19日（土） 14時～16時30分

日本大学ヌーリスタン踏査隊（2名・内現地参加1名）は1976年8月アフガニスタンのヌーリスタン地方に入域を果たした。現在におけるこの地域の状況は、外国人ツーリストに対しては、A.T.O.（AFGHAN Tourist Organizasion アフガン観光公社）により、ジャララバード（JALALABAD）／カムデッシュ（KAMDESH）あたりまでのみ入ることができる。以前は、危険そして政治上の理由から全くの孤立した地域であった。

この隊は、現地参加の日大OB・松波氏（在カーブル・カーブル大学体育学部講師・日本人会会長）—現在一時帰国中—の労に負う処が大きい。許可取得に際しては、政府よりの許可は降りないため、彼の生徒（アフガンでは有名なレスリングの選手・アマジャン、そしてワハンの知事の息子）をガイドとして連れていくことになった。この2人が、いわばパーミッション代りと言うべきか。

行程は、カーブル／パンシェール／ダシエトデウッド／アリュー／ヌーリスタン・パス／ディナールの往復である。ディナールに於いては、1週間程滞在して調査を行なった。

カーブルより車で、パンシェールに行きそこから徒歩である。パンシェールは、エメラルドの産出地としても知られ、ときどきセリ市がこの村で

影響が顕著に認められるということは、周知のところであるが、その点から見れば、「シルクロードの終着点」という言葉は、正倉院の性格の一面をよく言いあてていると言ってよい。それは言うまでもなく、唐代の中国が伝統的文化の上に西方の諸文化を広く取り入れて、国際的色彩のきわめて強い文化を形成した、その反映である。

ここではこのような特色をもつ正倉院の宝物の具体的な姿を観察しながら、その成立を七・八世紀の東アジアの歴史の流れの中において考えてみた。

(4)、(5)、(6)、(7)、(8)は配布パンフレットより  
( 抜すいして載せさせていただいた。 )

開かれるという。このセリ市には、カーブルから金持が集って賑わうとのことである。アリュは、標高が約4,000 mあり、ヒンズークシュの最も標高の高い村といわれている。アリュを過ぎヌーリスタン・パス（標高約5,000 m）を越えるとこれまでの荒涼とした景色も、一変し緑を多く見ることができる。いよいよヌーリスタン地方に入る。アリュを過ぎるとファルシー語が通じず、言語はヌーリスタン語となる。このヌーリスタン語はウルドゥ語やファルシー語と比べても全然共通点がなく、この地方独特のものらしい。この地方の統治については、アフガニスタン政府の行政は届いておらず、全く孤立した独特の文化をもっているようだ。宗教については、村人は全て敬虔なモスリム（回教徒）であり、酒や煙草は一切飲まない。回教圏でよく見られる、チャドリを被る女性もここでもその規律を忠実に守っているようである。ヌーリスタン人の顔立ちは、パキスタンのチトラル付近にもみられる、いわゆるカフリスタンである。全人口の約10%位が金髪、青い眼であり、一般的に背が高い。一部落には約50～60名が住んでいる。

主食はトウモロコシで作ったパンである。交易には、ジャララバード（JALALABAD）やパキスタンに入り、武器や生活必需品などを購入する

## 名古屋ヒマラヤ集会報告

## シッキムの夕べ

インドからMr. K. P. Sharmaをむかえシッキムの入城事情や観光地をスライドを使って紹介していただきました。また、当夜は新年パーティを兼ね、南米のブドウ酒、テキーラ、VSOP、ビール、アッサム・ティ、ケーキ、サンドイッチ、世界の各種ナッツ、大垣の羊かん、京都の八ツ橋など女性会員の準備でごちそうの盛られたテーブルを囲んでの楽しい会でした。別項にシャルマー氏の講演の要旨をまとめてあります。

出席者：岩水、水野、佐々木、沖夫妻、豊田、中村（好）、中村、潟上、川崎、加藤、増田、小川務、上田、加藤広美、高野、山田、耕井、K. P. Sharma、佐藤多美（敬称略）

とのことである。野菜にはこれといったものがなく、リンゴ（小粒）、木の実（桑の実）や薬草がその部分を占めているようである。夜間は灯がなく、非常の場合のみランプを使用するようである。各家（石を積み重ねすき間に泥を埋める）の外壁には鹿の角が飾ってある。この意味は一つには魔よけ、又もう一つには、その家の主人の狩猟の腕を誇るものとして飾ってあるようである。

いままで全く知られなかったこの地域の様子が次第に知らされてきた。この地域もやがて、多くの外国人が訪れることだろう。文化人類学や民族学のこの上ないフィールドとなると思う。

なお、当日は約60名の出席者があり盛況であった。出席者の中には、アフガニスタンに長く滞在していた人達が多く見られ、最後には懇親の場になった。（鈴木康志 記）

## シッキム

K. P. シャルマー

最近、外国人にも開禁されたシッキムはトレッキングに最適です。広さ 7,325 平方キロ、宮城県または静岡県とほぼ同じ山岳州です。

起伏に富んでおり、海拔 4,500 メートルでは高山性、それ以下では亜熱帯性で雨が多いというふうに変化します。

人口約 20 万、住民は古くから定住しているレプチャ族とチベットからの移民であるボティヤ族の両方で全体の約 1/3、大乗に帰依した仏教徒です。最も多いのがヒンズー教徒のネパリ族（ネパール人とは違います）。

シッキム州ほど植物の種類の豊富な州はインド亜大陸にも例がないでしょう。約 4,000 種の花があり、中でもランは 660 種、しゃくなげが 40 種以上あります。青いケンシもあり、5 月～9 月に 4,000 m 位のところで見られます。

海拔 1,200～3,300 メートルの山岳部にはヒマラヤ熊、シカ、いのしし、かわうそ、やく、など 81 種の動物が生息しています。蝶や鳥の種類は勿論数多く、川にはマスなど獲物がいっぱいです。

秘境シッキムへの入口はバグドグラ空港です。カルカッタから空路約 55 分です。ここから州都ガントクまで 120 キロの舗装道路が走っていますが、ダージリン経由の方が景色に恵まれています。

カルカッタから夜行列車でシリグリまで行き、

そこからバスでダージリンへ行くという方法もあります。シッキム旅行のベストシーズンはおおよそ 3 月、5 月、9 月中旬～12 月中旬。ランの最盛期は 4～5 月と 9～10 月、しゃくなげは低地で 3 月～4 月、高地で 5～6 月。低地ではモンスーンの 6 月～9 月を除いていつでもトレッキングが楽しめます。

シッキムの旅行には 3 つのタイプがあります。

## ① 短期コース

ヒマラヤの秘境を見るのに最適のコースで、州都ガントクのホテルに 2～3 日滞在して周辺を車でゆっくり廻るコース。

## ② 長期コース

主として、寺院、村、ヒマラヤ文化などを探索するにはガントクから更に奥へ入るにはテント生活ということになります。トレッカー向きで 5～7 日間。

## ③ トレッキングコース

花好きの方、高地のトレッキングを試みたい方は気のむくまま、時間の許すままにトレッキングできます。たいていの村へはジープで行くことができ、そこから歩くことになります。標高の高いところへのトレッキングはテントや炊事道具などを用意して行く必要があります。また、高地ではヤクによるキャラバンが可能です。

## ヒマラヤ関係資料の入手方法 — その1

稲 田 定 重

### 1. 研究の姿勢

日本隊がヒマラヤの殆んど全域に何らかの足跡を印している現在、各地域の資料を得ることは昔日に比してはるかに容易になっている。カラコルムのシャチェン氷河流域の山々に日本隊が次々と初登頂し、すばらしい写真がもたらされるなど、かつては夢想だにし得なかったことである。たしかに情報は豊富になってきており、ハウツウを求めるなら別にそんなに資料の探索などしなくとも済むようになっている。

けれどヒマラヤは単なるガイドブック片手に出かけて行くには余りにも大きく、広く、深い存在である。先人の足跡、歴史、文化、自然など、通りすがりの短い時間ではとうてい深く知ることはできない。国内でできる限り資料をあさり、勉強して行くことは、まず出発までの時間を充実させるし、更に現地での豊かな時間を持つことを可能にしてくれる。帰国後の実りあるまとめにもなり、次への発展も約束してくれるものである。まして、空白部といわれる地域や研究調査の分野をめざす場合、その行為の成否は国内での研究の深浅によって決められるといっても過言ではない。

ヒマラヤにはいろんな楽しみ方、接し方がある。自分なりの分野を創造し、そこに楽しみを見出せたとしたら至上の喜びであろうが、それも普段の勉強があってこそ生まれるものである。

私たちが接するヒマラヤはあくまでも「アマチュア」としての立場においてである。アマチュアとは何かといえば大上段になるが、要するにヒマラヤを生活の糧とはしない接し方であり、「楽しみ」としてのヒマラヤである。中にはアマチュアの領域を越える程に肉迫する方もあろうが、それはさておくとする。楽しさを求めるためのものであっても勉強の過程では苦しみを伴ない、忍耐を要求されることも出てくる。少なからぬ出費も必要とされよう。けれどそれも結局は得られる喜びを増幅し、苦労は成果となって自らに帰するものであることを考えれば納得できる。

勉強＝研究は何もヒマラヤに関する直接文献だけにあるのではない。ヒマラヤに想いを寄せる者ならば、自然、人文、社会科学等すべての領域から何らかの触発を受けるだろう。水平思考的発想はむしろそのような中から生れることが多い。「ヒマラヤ学入門」としてこの「ヒマラヤ」誌上に連載してきたことすべてが、ヒマラヤをめざす者ならば承知せねばならないことである。文献の分野そのものも立派なヒマラヤ研究の対象になるほど奥深いものである。ここでは文献学などということではなく、直接ヒマラヤに関する資料に限定してふれたい。

### 2. 資料名の探索

まず、研究しようとする領域に関していかなる資料が存在しているかを知らねばならない。幸いなことにこの段階の仕事は次のような秀れた基本文献の存在によって助けられる。資料の入手はまずこれらの基本文献の入手から始めると能率的である。

#### ※ 資料探索上有益な基本文献

深田久弥「ヒマラヤの高峰1～3」白水社、または、同「ヒマラヤの高峰1～7」雪華社、薬師義美「ヒマラヤ関係図書目録」、吉沢一郎他編「世界山岳百科事典」山と溪谷社、G.O.ディレンフルト・諏訪多栄蔵訳「第三の極地」朋文堂、ケニス・メイスン著・田辺主計・望月達夫訳「ヒマラヤーその探検と登山の歴史」白水社、登山講座別巻「山岳事典」

これらは総括的な文献検索に直接役立つが、タクティクス、登攀技術、高所順化というような専門項目からとらえるとすれば、それはそれでまた別な基本文献的なものを探るか、前記の基本文献を自分なりに工夫して活用するわけである。研究の深化によって必要とする基本文献はさらにレベルアップされるもので、果てしない文献のジャンルが広がってくるのである。なお前記の文献に出てくるのは大部分ではあるが必要とするすべてを引き出せるものではない。（以下次号につづく）



## 書評 セイロン島の密林遺跡

法政大学セイロン島密林仏跡探査隊  
1975年7月10日発行・限定500部・¥1000

カトマンズとコロンボ（スリランカ）間に航空路が開設されるそうだ。3月16日から週一便である。かつてのスリランカは仏教の繁栄した土地であった。中でもシンハリ族出身パラクラマ・パフ大王の前後、11世紀～12世紀にかけては仏塔を中心にした寺院、灌漑用の貯水池、水路、軍事砦が領内各地に建造され国家運営が活発だった。日本でいえば平安後期から鎌倉初期にあたる頃だ。

しかし、その後、再び激化した北方からのタミル族（南インド出身）侵入によって国家は南へ移動する度に衰弱した。最後のキャンディ王朝は英国によって滅亡する。もっともシンハリ族自体も紀元前にインドから侵入したアーリア系の民族であり、彼等はセイロン島先住民族のヴェダ族を制圧した過去を持っている。さて、王朝が亡び、各地に残された建造物は密林に埋没してしまった。現在、地元政府により仏教遺跡調査が進められているが発掘復元までは及ばず、遺跡保存も十分ではない。比較的是かどっているのは開拓のため再利用を計画している貯水池、用水路だという。

本報告書はそれらの仏跡と水利施設をマハウェリ川流域（セイロン島中央部を南から北へ流れる）に探査した結果を収録してある。内容は、a 仏跡などの歴史と解説および隊の目的と成果、b 調査結果報告、c 調査実際編、d 参考資料、の順に記載されている。全150ページ余の3分の2以上を占めるbは54項目の調査地について個別に次のごとく報告する。①調査日、②スタッフ、③位置、④アプローチ、⑤別名、伝説、一般情報、⑥全体的状況と位置関係、⑦各部分の状況、⑧考察、⑨平面図と写真。cは日記紀行文型式で遺跡以外のテーマ三つを語り現地の様子を側面から把握させる。ここは20ページ程だ。dもcと同じ位のページで、隊務報告をかね自分達が得た情報、経験を公開する。ガイド編であるから現地で協力してくれた人についても詳細に紹介している。

ところで、探検部OBの隊長岡村 隆は計画前に一つの仮説を持っていた。『探検的行為志願者は地理的探検の可能性がもう無いのだという通説をそのまま受取らずに、一度地理的探検の段階にまで引き返して行動してみようではないか。その結果が今後の探検活動に役立つのではないか』と。その対象がマ川流域の古代シンハリ文明遺跡であったという。仮説第一段階の「良い結果」は本書によって証明されたわけであり、それは詳細なbのほかdによってもいえる。dでは、たいがいの場合、発表をひかえてしまうようなものまで活字にしている。いわば、手品の種あかしなのである。そこに将来の第二段階も証明できるような隊員の十分な自信を見るように思う。

地理的探検への回帰（と実行）が彼らにとっては将来への一便法であっても、我々には刺激的だ。一時代前の探検やヒマラヤ初期探検登山と規模を比較すれば見劣りしても当事者の感動は変わらない。知られすぎてしまったという環境を嘆くより情報多量を逆手にとったの新発見ができる。手はじめに探検成果を探検すればよい。岡村らは新発見の遺跡を数カ所記録に残しひそやかな満足感にひたったと言う。まだまだ地球上に知られていないことが存在するのだ。本書の3分の2以上を占めるbからヒマラヤ登山報告書を考える。定型的報告書はcの方法によるページが2分の1ほどを占めてしまい残りがdとなる。登山対象が地図の空白部といわれるような、比較的歩かれていない（少なくとも日本人の行っていない）土地にあるならばその形式も有効だが、現在はそういった対象がまれとなっている。登山報告書は日程ごとの記述よりも登山方法そのものについての論考部を多くしてよい。計画書における目的と結果についての報告がアンバランスだ。だが、最近、いかに行くかよりもいかに登るかがテーマになっているから次第に変化していくのかもしれない。また、本書では、執筆者と編集陣の間で何を、誰相手に、どのように主張するかよくわかっているのだろう。一般人まで読者になれる平易な文で書いている。これも本書の特徴だ。発行元は本誌60号本欄紹介の日本観光文化研究所。東京の茗溪堂には昨年11月より在る。また同所発行の「あるく・みる・きく」111号が本報告書執筆によるスリランカ特集で、こちらは主に村人など人間中心のルポ。同一執筆からさらに新鮮なマハウェリ川流域を引き出すことに成功している。

## 日本からヒマラヤから

伊藤 裕明 様 岩手県宮古市 2月15日

H&S大作戦のうち、中国の北京からトンコウ、タクラマカン沙漠、そして、サマルカンドへ通過の計画があるようですが実現の可能性はあるのでしょうか、また、チベットへの入域の可能性はいかがですか。もし、実現するならば是非参加したいものです。

★可能性はあります。現在、中国大使館と接手中です。はっきりしたら「ヒマラヤ」誌上で報告し、参加者を募集しますが、人員が限られた場合はチベット研究会々員を優先しますのでご了解下さい。チベット研究会はもう2～3人の欠員はあるようです。詳しくはチベット研究会事務局にお問合せ下さい。

小野木三郎 様 岐阜市 2月15日

私は、もともと登山そのものをスポーツとしては考えてはならない立場にあります。植物生態学から、フィールド・ワークに従事し、Natural Historyの新しい発展を願いつつ、しかも、歩くこと、歩行文明のとりもどしとそれへの目覚めこそ、現代日本人の緊急最大課題と、おおげさに考えているひとりです。自然への限りなき知的好奇心……その心の内なる欲求にもとづいての行動的体験こそ、人間には最大の宝物と考え、郷土岐阜県内を主なフィールドとしている15年生教員。昨春から、新設の「岐阜県博物館」自然担当の学芸員になったもの、精神的には自称万年少年です。その証拠に、とうとう少年時代からのインドゾウに抱くあこがれ？……につられて、インド・スリランカのWild Life Sanctuary 五ヶ所を訪ねたほどです。貴会の中には東ヒマラヤ研究会も始動とか、私もヒマラヤ地帯は、その自然環境について、行ってこの目で見たい、調べたい……、その知的好奇心は、今最先例に熱情として沸き上がっているところですよ。この次は、ヒマラヤ山脈地帯へ……と、決めているところですよ。

CALCUTTAからアッサムのGAUHATIへ飛んだ飛行機の窓から眺めた白銀の山々、……その

時から、事前勉強を始めているところですよ。

アッサムでは、MANAS WILD LIFE SANCTUARYとKAZIRANGA WILD LIFE SANCTUARYの二ヶ所だけの訪問でしたが、マナスでは、ブータン側にのみいるGolden Langurを探し求め、15～6頭の集団に出会いました。（中略）山は、ただひたすらにその頂に立つためのもの……、そういう思想オンリーだけではなく、やはり、山をとりまく自然そのもの、そこに住む人々の生活、ヒトと自然とのかかわりをめぐる叙事詩……そうした知的な未知の世界へのあこがれを大切にしたいと思っています。（中略）

私のつたないこれまでの自然散策体験が「歩いて眺めて考えて 植物社会の一等王国（岐阜県）」（教育出版文化協会・岐阜市）と題して出版されました。（中略）

未知なる自然域への行動的体験への欲望に燃え続けているつもりであり、ヒマラヤへヒマラヤへ……と日夜あせる心を押えつつ、自分なりにあれこれ調査・研修しているところですよ。

### ネパールとの美術交流

日本美術家連盟では、UNESCOの精神に則り、アジア諸国との美術交流を深めるため、その第一陣として、画家の石川滋彦、前田常作両氏および、連盟事務局長倉田平吉の三氏が去る1月7日出発し、ネパール、インド、スリランカを訪れ、大きな成果を得て1月末帰国した。

まずカトマンズでは、大使館へ表敬の後、NAFA（ネパール美術協会）を訪れ、書記長のMainali氏（彫刻家）に会見、ネパール美術の現状について聴取、折柄NAFA館内で開催中のNational Exhibition（このところ毎年年初半月位開催されている）や同館内のStudioを見学、又、展覧会場でNAFA会員有志と座談会をもった。このあとカトマンズ市内にある美術学校見学、NAFA会員を期間中に数多く訪れ懇談をした。通訳は、日本語学校の先生、ビムラ、プレム・ラタのお二人の手をわずらわせた。カトマンズ滞在5日、インドに向った。（藤江 幾太郎 記）

## HAJアフガニスタン隊、その後

佐藤 優

- ① 52年2月20日 奈良教育大付属中学校で「アフガニスタンの山旅」の映画会を開催、約30名が出席した。
- ② 52年3月2日付、毎日新聞近畿版に以下のような報告書「バダクshanからヌーリスタンへ」の書評が掲載された。

『副題はアフガニスタン北奥の踏査・登山となっている。日本ヒマラヤ協会が昨年6月から8月にかけて派遣したアフガニスタン登山隊（有田豊隊長）の遠征記録を、隊員の一人で奈良教育大付属中学の佐藤優教諭（37）がまとめた。』

エベレスト、マナスルなど8000mクラスの巨峰が並ぶネパールには、わが国からも多数の登山隊が繰り込んでいるが、アフガニスタンは比較的なじみが薄い。ネパールのように登山のために必要なポーターや通訳を簡単に雇えないし、アフガニスタンの登山規則が複雑なためだ。この本は、それらの障害をいかにして乗り越え、遠征したかを詳細に記したもので、装備リストや会計報告も掲載している。

遠征一年前から現地に飛んで事前調査。一方で隊員たちは青森県の八甲田山で登山に備えて合宿、研修会を繰り返した。こうして昨年6月28日、9人の隊員が羽田を出発。パキスタンに入国したあと、陸路でアフガニスタンの首都、カブールに入り、8月22日まで同国北部から南部にかけての山岳を踏査、途中、コーイ・ブラ（5,360m）に初登頂するなどの成果を挙げた。

週刊紙大、167ページ。定価2,200円。日本ヒマラヤ協会発行。』

- なお、HAJ事務局の残部は僅少なので、ご希望の方は早目に代金を添えてお申し込み下さい。
- ③ 52年3月5日 名古屋市中日ビルで映画と蝶を中心とした報告会が盛大に開催された。なお、蝶に関する成果は3月15日発売の「マニア」4月号（平凡社刊）にカラーグラビアで特別企画として掲載され、話題を呼んだ。

## エアー・サイアムの事件について

鈴木 康志

1976年末に突然と起った運航中止、そして1月に入り事実上の倒産。かつて前例のないことだっただけに、報道機関の取り扱いも大きいものだった。（ベトナム航空は戦争のため、最近の東アフリカ航空は政治問題のため運航中止）。以前からこの社は格安で航空券を売っていたためフライトも常に満席に近い状態であった。東京／バンコクが往復で7万円とか8万円。東京／ロスアンジェルスが13万円とか信じられないような金額であった。会員の方でも利用された方がたくさんいたと思います。

格安航空券には、必ずいくつかの条件が付きものです。例えば、絶対にREFAND（払い戻し）が効かない。他社への乗り換えができません。これは今でも変わっていません。このような条件というのは、いわばトラブルの可能性というものでしょうか。つまり格安航空券を購入する場合には、トラブルの可能性も一緒に購入したということです。そこで文句をいうのは、バーゲン品を買ってすぐこわれたとクレームをつけるのと同じで文句をつける方がおかしいわけです。そして現実にした場合には、アジアやアラブの国々の会社（一般会社も含めて）というものは、つぶれて当たり前というのが常識的な考えですから、つぶれても決してあわてず、いかに責任をのがれようと考えます。今度のエアーサイアムも良い例です。つぶれてから何もかも政府が悪いとわめきたてました。会社がこんな調子ですから、当然、その政府も神経が太くなければなりません。政府が2週間位静観したのもうなづけます。

いずれにしても航空券に限らず何事が起ったら、自分でできることは極力自分で後始末をする、そういった心構えがなければ、海外旅行はできません。お客様は神様というような考えを持っていたら、とんだ目に合うことも肝に銘じておくことです。そして航空券も格安ならサービスも格安です。

今度のこの事件は色んな意味を含めて、良い教訓になったようです。

## 「ヒマラヤ」年間講読料（会費）納入のお願い

HAJの活動の源となるのが皆様の会費です。未納の方は封筒の表に「前金切れ」の赤字が印刷してあります。至急、納入して下さい。振替「名古屋 21645 日本ヒマラヤ協会」をご利用下さい。

行きちがいに納入いただいた方がありましたらお許し下さい。なお、納入ない場合は「ヒマラヤ」の発送を停止させていただきます。

<<<<<<<<<<<<<<<<

秘境小チベット。ラダック  
と未知なるザスカル山群へ

>>>>>>>>>>>>>>>>  
《TIBET》

| コース    | 期 間   | 出 発 日   | 費 用(円)  | 添 乗 員 |
|--------|-------|---------|---------|-------|
| A      | 9 日間  | 8 月 7 日 | 329,000 | 有     |
| B      | 14 日間 | 8 月 7 日 | 372,000 | 有     |
| C      | 19 日間 | 8 月 4 日 | 372,000 | 前半のみ  |
| D(フリー) | 28 日間 | 8 月 4 日 | 234,000 | なし    |
| E(登 山) | 19 日間 | 8 月 4 日 | 450,000 | 有     |

小チベットと呼ばれるラダック、民族的にもチベット人と変わらない人々が住んでいます。主都レーは、標高 3,600 m ほどで、冬は極地並の寒さになり、その生活環境はかなり厳しいものです。そうした中でラダックの人たちはチベット文化を絶えず守り続けてきました。また、ザスカル山群と呼ばれるのはラダックの南にあり、5、～6,000 m 級のピークのある山群です。これらの地域をトレッキングするには、ネパールのように簡単に行かず、食糧も入手が困難で、ポーターもなかなか集らない状態です。厳しい旅をするという覚悟が必要です。それがまたトレッキングの原点といえる楽しさかも知れません。

※ 9 日間の方は打合せの上、現地事情も加味してスリナガルとその周辺に変更する場合もあります。

＜目 程＞

(定員各 20 名)

| A | B  | C | 都市名           | 時 刻                                                                                                                                                                               | 交通期間   | 概 要                                         |
|---|----|---|---------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|---------------------------------------------|
| 1 | 1  | 1 | 東京<br>デリー     | 12:50<br>22:35                                                                                                                                                                    | AI 301 | 羽田より空路にてインドへ。夜、ニューデリー到着。到着後ホテルへ。            |
| 2 | 2  | 2 | デリー<br>スリナガル  | 10:30<br>12:35                                                                                                                                                                    | IC 423 | ニューデリーより花と水の都スリナガルへ。着後、ハウス・ボートへ。            |
|   | 3  | 3 | スリナガル         | 滞                                                                                                                                                                                 | 在      | トレッキング諸準備。                                  |
| 3 | 4  | 4 | スリナガル<br>カルギル |                                                                                                                                                                                   | 車      | 早朝、車にてカルギルへ。（テントまたはレストハウス泊）                 |
| 4 | 5  | 5 | カルギル<br>レー    |                                                                                                                                                                                   | 車      | 早朝ラダックの主都レーへ向う。夕刻レーへ到着。                     |
| 5 | 6  | 6 | レー            | 滞                                                                                                                                                                                 | 在      | レー市内観光、ティクセ寺、ヘミスゴンパなどを見学する。バザールで買物を楽しんで下さい。 |
|   | 7  | 7 | レー            | 滞                                                                                                                                                                                 | 在      |                                             |
|   | 8  | 8 | レー            | トレッキングや調査に出発<br>*到着後8日間の昼食より、帰国前々日の昼までの各自の責任と費用で行動していただきます。ジープやガイドの手配などはお手伝いします。（9日間を除く）<br>*ザスカール山群のトレッキング、ラダック周辺の調査など充分にお楽しみ下さい。<br>*帰国前々日にはスリナガルの指定された宿舎に帰れるように余裕を見て日程を立てて下さい。 |        |                                             |
| 6 | 11 | ⑩ | スリナガル         | 帰                                                                                                                                                                                 | 着      | 指定宿舎に16時までに帰着。                              |
| 7 | 12 | ⑪ | スリナガル<br>デリー  | 13:15<br>15:10                                                                                                                                                                    | IC 424 | 空路にてニューデリーへ戻ります。                            |
| 8 | 13 | ⑫ | デリー           | 18:55                                                                                                                                                                             | AI 306 | 午前中＝自由行動。夕刻の便にて羽田へ。通関後解散。                   |
| 9 | 14 | ⑬ | 東京            | 11:20                                                                                                                                                                             |        |                                             |

|   |               |             |                                    |             |       |
|---|---------------|-------------|------------------------------------|-------------|-------|
| D | フリール 9日間      | 8月7日発, 14日間 | 8月7日発, 19日間                        | 8月4日発, 28日間 | 8月4日発 |
|   | 費用: 234,000 円 | 添乗員: 無      | 東京・スリナガル往復航空運賃と途中の滞在費(デリー) 2泊分を含む。 |             |       |

E 小登山コース ガイド・添乗員：有 19日間，8月4日発， 費用：45万円（個人費用を除く一切の費用含む）  
＝詳細は打合会で＝



## 《お申込み方法》

\* 下の「申込み書」に、申し込み金 50,000 円をそえてお申込みください。なお、お申込み金を除いた総費用は出発 1 カ月前までにお支払いねがいいます。

\* 取消料 お申込みの後、お客さまのご都合により参加をお取消しになられる場合は、下記の取消料をお支払いいただきます。

① 出発 2 カ月前以降～2 週間まで…50,000 円(申込金全額)

② 出発 2 週間前以降～3 日前まで…旅行総費用の 30%

③ 出発 3 日前以降～当日まで…旅行総費用の 50%

④ 出発以後…旅行総費用の全額

なお、当社の責任とならない各種ローン取扱い手続上の事由およびその他渡航諸手続上の事由により参加が不可能になった場合も、上記取消料を申し受けます。

また、お取消時にすでに渡航手続開始または終了している場合は、上記取消料のほかに、渡航手続所要実費をお支払いいただきます。

また、所定の取消料は、お申込み時点の如何を問わず適用されるものです。

## 《旅行条件》

\* 参加費用は昭和 52 年 4 月 1 日現在を基準にしてあります。将来、航空運賃、為替相場などに変更があった場合は経費を変更いたします。定員に満たない場合は旅行を中止することがあります。

\* 旅行費用に含まれるもの

① 航空運賃…旅程に明示した航空機エコノミークラスの運賃

② その他の輸送機関運賃…旅程に明示された交通手段の運賃

③ 宿泊料金…原則として宿泊地の 1 級ホテル(1 室 2 名基準)

④ 食事料金…全行程 3 食付

⑤ 観光費用…旅程に明示した観光およびそれに必要な入場料、ガイド料など

⑥ 手荷物料金…1 人 20 kg

⑦ ガイド・ポーター料

⑧ 添乗員経費

⑨ 団体行動中の税およびサービス料

\* 旅行費用に含まれないもの

渡航手続費/旅券印紙代/査証料/予防接種料/空港税/旅行傷害保険料/超過手荷物料金/その他日程に明記されていないあらゆる行動の費用および食事料金、また電報料、クリーニング代、おみやげ代など個人的費用のすべて

\* くわしい旅行条件は別途にお渡しする「旅行条件書」「旅程表」および株式会社トラベル・ジャパンの旅行業約款によります。

## 《ご注意》

① 発展途上国、特殊地域では政治、経済、治安などの事由により、予定の交通機関、宿泊施設などが一方的に突然変更されたりする場合もあり、天候も含めた現地の事情が変りやすいため、旅行日程はその時々条件によって変更されますが、払戻しの対象にはなりません。

② 旅行中、天災・火災・不慮の災害・政府および公共団体の命令・政変・ストライキ・戦争・暴動・疾病・隔離・税関規制など不可抗力の事由により生じた損害・盗難・詐欺・暴行・疾病・傷害など・旅行代理店の責任外の事故による損害、またお客さまが法令もしくは公序良俗に反する行為を行なったために生じた損害については責任を負いかねます。

③ 参加者に病気、あるいは事故などの発生した場合は、主催者の判断によって、医療施設などの完全な場所にヘリコプターなどを使用し、迅速に当事者を収容いたしますが、それに要した費用は、すべて当事者に負担していただきます。

④ 航空機運輸上の都合、その他の理由により旅行の実施が困難な場合、その旅行をとりやめることがあります。また、申込者が最低催行人員に満たない場合は、旅行費用の変更もしくはその旅行を中止することがあります。

## 《申込みおよび旅券申請に必要な書類》

- (1) 申込金 50,000 円
- (2) 申込書 1 通
- (3) 戸籍抄本 1 通(最近 6 ヶ月以内に本籍より取り寄せたもの)
- (4) 写真 5 葉(パスポート用写真、5 cm × 5 cm・背景無地・正面脱帽・スピード写真不可)
- (5) 住民票 1 通(最近 6 ヶ月以内に現住所の市、区役所より取り寄せたもの)

### 【トラベル・ジャパン

#### の場所】



### 旅行参加申込書

申し込み金 50,000 円をそえて、下記ツアーに参加を申込みます。

コース名 \_\_\_\_\_

ご希望の出発日 \_\_\_\_\_

ご氏名(ふりがな) \_\_\_\_\_

男・女 年令 \_\_\_\_\_ 才 ①

ご住所・電話番号 \_\_\_\_\_

☎ \_\_\_\_\_

ご勤務先等ご連絡場所 \_\_\_\_\_

☎ \_\_\_\_\_

予告

「ヒマラヤの彼方へ」講演と映画の会

インド・ヒマラヤの第一人者であるJ. シン氏(エア・インタア、登山・トレッキング部長)をむかえ、水野勉氏(中央アジア研究家)の講演もお願いし、下記のような日程(案)で講演と映画の会を開催します。多くの皆様の参加をお願いします。

主要内容

講演 「インド・ヒマラヤの魅力」J. シン氏  
(資料配布・通訳つき)

講演 「シルクロードの山と人」水野 勉氏  
(東京・小山・郡山のみ)

映画 シルクロードまたはヒマラヤの映画

入場料 大人500円 小人(中学生以下) 200円

入場券は各地区責任者を通じて購入して下さい。  
HAJ 名古屋に代金をそえてお申し込みいただければ郵送します。2,000円までは切手で結構です。  
入場券の送料はHAJで負担します。

日 程 (A) 講演と映画の会

- 7月24日(日) 17時00～19時30 「名銀ホール」
- 7月25日(月) 18時00～20時30「清芳幼稚園大ホール」
- 7月26日(火) 18時00～20時30「郡山商工会議所会館」
- 7月27日(水) 18時00～20時30「八戸商工会館」
- 7月30日(土) 14時00～16時30「帯広市勤労者福祉センター」
- 7月31日(日) 18時00～20時30「旭川市民文化会館」
- 8月1日(月) 18時00～20時30「北海道新聞社ホール」
- 8月3日(水) 18時00～20時30「日本交通協会  
大会議室」

(B) 北海道花と山の旅

7月28～8月1日まで上記日程を追って北海道中央部を車で旅します。

◇7月28日 苫小牧(2h/68km)→新冠ユートピア牧

場(武田牧場長より名馬“ハイセーコー”の話を聞く)  
夜は牧場産の羊肉バーベキューの食べ放題。

宿泊:ユートピア・ロッジ

◇7月29日 新冠(3h/130km)→様似町→アポイ岳

登山(登り3時間、下り2時間)→アポイ山麓

アポイ岳 日高山脈のいちばん南にあるこの山(810.6m)は海霧の影響をうけるので気温が低く、高山植物のお花畑が美しく、珍しい種類も多い。頂上からはきびしい山容の南日高の山なみが遠望され、また、美しい海岸線も望まれる。

◇7月30日 アポイ山麓(1h/29km)→エリモ岬(4h/132km)→帯広(集会後)→(1.5h/50km)糠平

エリモ岬から帯広へ 北海道南端にあるエリモ岬は、なだらかな丘陵がするどく海に没し、黒潮と大地の接点となっている。ここから黄金道路を走り、車窓から入る波しぶきをあび帯広へむかう。帯広から大雪山山中にあるウベベ山の見人湖のほとり、糠平温泉に到着する。

◇7月31日 大雪高原→大雪ダム→層雲峡→(ロープウェイで黒岳往復)(3h/90km)→旭川

◇8月1日 旭川→十勝岳の望岳台→吹上温泉→十勝岳温泉(5h/230km)→札幌

札幌 北大クラーク会館で昼食後、北大低温研究所を見学(映画と説明)。北大構内、植物園など見学。18時から北大教授の特別講演を含んだヒマラヤ集会を開催。終了後、有志でサッポロビール園でジンギスカン料理と生ビールの飲み放題で北海道最後の夜を楽しみます。8月2日は自由参加。

費用 実費をいただきますが、交通費、宿泊費、食費、観光費を含めて1日当たり大人7,000円、子供5,000円位を考えておいて下さい。

(C) 洋上ヒマラヤセミナー

なお、上記の日程に合せて下記のフェリーによる「洋上ヒマラヤセミナー」を開きます。

7月27日 八戸港発22時00→苫小牧着28日09時30 → 合  
(東日本フェリー)  
7月26日 名古屋港発18時30→仙台着27日18時00 流  
→苫小牧着28日10時45  
(太平洋沿岸フェリー)

③と⑤を組合わせた北海道の山旅とヒマラヤ洋上セミナー(札幌で解散)に関する費用は実費をいただきます。フェリー、宿泊などの手配は事務局でおこないます。これに参加希望の方はHAJ名古屋事務所へお問合せ下さい。

## AIUのトレッキング用海外旅行保険

この保険は、トレッキングをふくむ旅行期間中のケガや病気による医療費、死亡金をお支払いいたします。ただし、ザイル、ピッケル、アイゼンなどを使用する登山行動中の事故はカバーいたしません。

保険料はタイプおよび期間で決ります。3タイプのうち1タイプをお選び下さい。申込書の「旅行目的」の欄に「Trekking」とタイプ名（A、B、C）をお書き下さい。申込書はHAJ名古屋事務所にありますので、出発前1カ月以前にお問合せ下さい。

| 保障の内容 |         | Aタイプ  | Bタイプ    | Cタイプ    |
|-------|---------|-------|---------|---------|
| 傷     | 死亡・後遺障害 | 500万円 | 1,000万円 | 2,000万円 |
| 害     | 傷害治療実費  | 200万円 | 250万円   | 300万円   |
| 疾     | 疾病治療実費  | 200万円 | 250万円   | 300万円   |
| 病     | 疾病死亡    | 500万円 | 500万円   | 500万円   |

なお、保険期間の数え方としては、初日は算入しません。たとえば11月10日から11月24日までの旅行ですと、保険期間は14日間。また、普通の観光などを目的とした海外旅行のための保険も扱っています。保険料は上記の約1/3になっています。

| 保険料金      |         |         |         |
|-----------|---------|---------|---------|
| 保険期間      | Aタイプ    | Bタイプ    | Cタイプ    |
| 8日～10日間迄  | 12,150円 | 18,910円 | 30,760円 |
| 11日～14日間迄 | 12,650円 | 19,610円 | 31,760円 |
| 15日～17日間迄 | 12,960円 | 20,020円 | 32,320円 |
| 18日～21日間迄 | 13,510円 | 20,820円 | 33,520円 |
| 22日～24日間迄 | 13,920円 | 21,330円 | 34,180円 |
| 25日～27日間迄 | 14,490円 | 22,160円 | 35,410円 |
| 28日～1カ月間迄 | 14,740円 | 22,510円 | 35,910円 |

インド大陸、中近東方面へ当社独自のプランをいたしております

### ツアー名

- ★シルクロード 6,000キロ
- ★ネパールとアフガニスタン
- ★砂漠の国アフガニスタンと最後の桃源境フンザ
- ★大ペルシャとアフガニスタン

——お問い合わせは下記まで—— 一般登録 372号

### (株)トラベル ジャパン

〒100 東京都千代田区有楽町2-2-1  
ラクチョウビル5F 電話 (03) 572-1461  
担当———外池・小島・丹羽・藤本

### 小チベット ラダックへ ベース料金 234,000円

〔東京・デリー・スリナガル往復、デリー宿泊料金〕

8月4日発：19日間、28日間／8月7日発：9日間、14日間／各20名

現地費用は別途(例) 9日間／3食ホテル付観光含95,000円

### ヒマラヤでお正月を ベース料金 212,000円

〔東京・カトマンズ往復、デリー及カルカッタの乗継代含〕

12月25日発：28日間／12月26日発：14日間／12月29日発：8日間／各20名

現地費用は別途(例) 8日間／3食ホテル付観光含74,000円

以上はいずれも52年4月1日を基準にしています。現地事情その他で変更する場合もあります。

主催：トラベル・ジャパン（株）一般登録 372号・取扱主任… 外ノ池、愉平

〒100 東京都千代田区有楽町2-2-1 ラクチョウビル5F TEL574-0241

